

# チベットにおける論理学研究の問題

——学問寺の基礎教育課程——

小野田俊蔵

## 一

流伝後期 (Phyi dar) のチベットの仏教学、特に顯教学を考へる場合、まず考慮されねばならないのはサンブ Sang phu 大学問寺の存在であろう。サンブ大学問寺はアティーンシャ Atsa の弟子であったコク・レクペーシヘーラブ rNgog legs pa'i shes rab がサンブのネットワーク sNe'u thog に一〇七三年に建立した寺で、その後多くの大学者を輩出した<sup>(1)</sup>。中でも高名なのがレクペーシヘーラブの甥で数多くの訳業を残したコク・ロデンシエーラブ rNgog Blo ldan shes rab (1059-1109) であり、そ

してチベットの中観学や論理学の歴史に特異な足跡を残したチャパ・チューキセンゲ Phya pa Chos kyi seng ge (1109-1169) である。

チャパは中観学において、後世の多くのチベット人学者がチャンドラキールティ Candrakīrti 系の中観を重視するのに対して、バーヴァヴィヴェーカ Bhāvavivēka の系統、すなわち後に「自立論証派 (Rang rgyud pa)」<sup>(2)</sup>とよばれる立場をとったと伝えられるが、彼はまた、論理学においても後世の多くのチベット人学者と立場を異にする。そもそもチャパの時代にはチベットに新旧二派の論理学が存在していた。すなわちマ・ゲウエーロトゥー

Ma dGe ba'i blo gros に始まる「旧論理学派」(Tshad ma rnying ma)と、前述のロク・ロベンシエーラフが『プラマーナヴァイニシニキヤヤ *Pramāṇaviniścaya*』を訳出し研究したことに始まる「新論理学派」(Tshad ma gsar ma)の二学派である。<sup>(3)</sup> チャパが座主としていた頃のサンブ大学問寺は後者の伝統の中であり、チャパはその立場からチベット撰述文献では恐らく最初の論理学綱要書『*Ywāra bsDus grwa*』(ཤེད་ཤེད་ཀྱི་ཏཱ་ཤ་མའི་བསྟན་འཛིན་)を著したと伝えられる。<sup>(4)</sup> 残念ながら同書の現存は確認されていないが、ロベンシエーラフから伝えられた『プラマーナヴァイニシニキヤヤ』に準拠しつつもチャパ自身の独創的な考えが織り込まれたものがあったと考えられる。チャパ自身の努力と、そしてツァンナクパ・ツントゥーセンゲ *gTsong nag pa brTson 'grus seng ge* やツァク・ワンチュクセンゲ *rTsaqs dBang phyug seng ge* など「八大獅子」(Seng chen bryad) とよばれたチャパ門下の秀逸たちによる研究講説によって盛んになった<sup>(5)</sup>このサンブの『プラマーナヴァイニシニキヤヤ』研究の伝統も、十三世紀初頭にチベットに渡ってきたシャ

ーキヤシユリーバドワ *Sakyasribhadra* が、インドから新しくもたらした『プラマーナヴァールッティカ *Prāmaṇavārttika*』研究の新しい動きによって大きく影響を受けたのである。<sup>(6)</sup> この第三の論理学派の隆盛はサキヤ *Sa skya* 派の大学者サキヤ・ンヂェイタ・クンゲー・ツェン *Sa skya pandi ta kun dga' rgyal mtshan* (1182—1251)とその弟子のワンクパ・リクペーセンゲ *ru' yung pa Rigs pai seng ge* の力によると伝えられている。<sup>(7)</sup> ちなみにサキヤ・ンヂェイタは論理学に関して『リクテル *Tshad ma rigs pai gter*』と題する名著を残している。<sup>(8)</sup> ちよつ、ゲルク dGe lugs 派の派祖ツォンカ、*Tsong kha pa Blo bzang grags pai dpal*(1357—1419)は彼の教学の多くをサキヤ派のレンダワ *Red nda' ba* (1349—1412)から受けつづるが、『プラマーナヴァールッティカ』の相承もサキヤ派の系統であり、<sup>(9)</sup> 相承の系譜から言えばツォンカはシャーキヤシユリーからサキヤ・ンヂェイタへと伝わった第三の論理学派の流れを汲むものである。ただし、このレンダワやその師ニャ・ン *Nya dpon kun dga' dpal* の系統はサキヤ派の本流とは異質のもの

であったかも知れないと言われている。<sup>(10)</sup> このことが後にツォンカパの教学を批判したサキヤ派の諸論師タクツァン *ngor tsa'ur wa* ・シエーラフリン *shen* <sup>(11)</sup> *stag tshang lo tsā da Shes rab rin chen* (1405—?) や *ngolam* ・ *ngon pa* <sup>(12)</sup> *Go ram pa bSod nams seng ge* (1429—1489) などと、サキヤ・ンヂェイタの『リクテル』に批判的であった<sup>(13)</sup>ゲルク派の諸論師タルマリン *cham* <sup>(14)</sup> *Dar ma rin chen* (1364—1432) や *ka'ra* <sup>(15)</sup> *mkhas grub rje* (1385—1438) や *ngab* <sup>(16)</sup> *ngag yam shen* *ngon* <sup>(17)</sup> *Jam dbyangs bs-had pa* (1648—1722) などとこの二派の間で交わられた批判応酬のひとつの要因であるとも考えられるのである。いずれにせよチベットにおけるインド論理学書の研究は徐々に『プラマーナヴァイニシニキヤヤ』から『プラマーナヴァールッティカ』中心へと移行してゆくのである。それらの動きの中で「新論理学派」の流れを汲むチャパの論理学説は「インド論理学書の研究」という領域では姿を消してゆくのであるが、その反面、サキヤ派やゲルク派のツェンニャ *mtshan nyid pa* (顕教哲学者)の間では、そのチャパ流の独特の思考の精緻さが注

目されつつ、<sup>(18)</sup>特にゲルク派ではやがて大学問寺が徐々に整備されてゆくにつれて、チャパが創始したと伝えられる『*Ywāra bsDus grwa*』の学習が僧堂教育での基礎学習として導入されていったのである。<sup>(19)</sup> 前述したようにチャパ作の『ドゥラ』は現存が確認されていないが、ロンドルラマ・カフン *ro'p san* *Klong rdol bla ma Ngag dbang blo bzang* (1719—1794) の *ngag yam* <sup>(20)</sup> *gter* <sup>(21)</sup> *[kha dog dkar dmar]* *[rdzas chos ldog chos]* *[spyi dang bye brag]* など十八の章目からなる書物であったようだ。これらの章目のほとんどは後世の同じく『ドゥラ』と題されるゲルク派の一连の文献にもそのまま継承されており、チャパがサンブ大学問寺で目指したインド論理学のチベットの消化という問題は、後世のゲルク派大僧院での「ドゥラ」あるいは「リクラム *rigs lam*」とよばれる基礎学習課程として姿を変えつつ受けつがれ、深められていったのである。

二

さて、ゲルク派のウー地方三大根本道場、すなわち

ガンテン dga' Idan' チーポン' Bras spungs' セラセ  
 等の三大僧院の履修課程が今日伝わるように整備充実さ  
 れたのは、ダライラマ七世のケーサンギヤムツォ bsKal  
 bzang rgya mtsho (1708-1758) の時代であったといわ  
 れる<sup>(15)</sup>。三大僧院のそれぞれは複数のタツワン grwa tsh-  
 ang (学塾) によって構成され、そのそれぞれはタツワ  
 ンは複数のカラムツェン khams tshan (出身地別に設けられ  
 ている学寮) によって成り立っている。履修の課程はタ  
 ツワンに依って異なる。カラムンギヤムツォ Phur bu loog  
 Ngag dbang byams pa (1682-1762) の撰述による  
 一七四四年頃、ガンテン寺にはチヤンツェン Byang rtsé'  
 シヤンツェン Shar rtsé の二学塾、チーポン寺にはローヤ  
 ノリン Blo gsal gling' トワン sGo mang' チヤン bDe  
 yang' シヤンロン Shag skor' トアーキヤムツォ Thos  
 beam gling (Gyal ba)' ヒヤンロ'Dul ba' カンツェン sNgags  
 pa の二学塾、ネリセラ寺にはキヤ rGya' ヒヤン  
'Brom steng' トアーキ sTod pa' メーン sMad pa の旧  
 四学塾とチューン Byes pa' カクン sNgags pa の諸学  
 塾があったといわれ<sup>(16)</sup>。これらの内、二十世紀中頃まで各を

と定めるのはガンテン寺のチヤンツェンとシャルツェの二  
 学塾、チーポン寺のローセルリン、ヒヤム、デヤム、カ  
 クンの四学塾、そしてセラ寺のメーパ、チューパ、カク  
 ンの三学塾である。カクンとメーパは密教の儀軌を専門  
 にする学塾であるからツェンニー mtshan nyid (顯教香  
 学) の履修課程は含まれていない。  
 各学塾での課程は微妙に相異するが、大綱は五函 (Po  
 ti Inga) とよばれる五つの主要課題の学習である。五函  
 とはそれぞれ  
 一' Tshad ma (因明' pramāna)  
 二' Phar phyin (般若' prajñāpāramitā)  
 三' dBa ma (中観' madhyamaka)  
 四' 'Dul ba (誓' vinaya)  
 五' mNgon mdzod (俱舍' abhidharmakośa)  
 である。この五つの課題はそれぞれ複数のチンタ'dzin  
 grwa とよばれる学級に細分され、その学級の次第を徐  
 々に登りつめることにより最後には博士 (ゲシヘー dge  
 bshe) の位が与えられるのである。全部の課程を終了す  
 るためには少なくとも十数年の歳月を必要とする。この

を注目してきたものは、般若、中観、律、俱舍のそれ  
 ぞれが『現觀莊嚴論 mNgon rtogs rgyan, Abhisama-  
 yalanikṛatā』『入中論 dBa ma la 'jug pa, Madhya-  
 makatvāra』『律經 'Dul bai mdo, Vinayasūtra』  
 『俱舍論 mNgon pa mdzod, Abhidharmakośa』などの  
 特定のインテ原典を核として学習されるのに対して、因  
 明のみがインド原典を用いずに学習されるといふ点であ  
 る。課程の名称も「マツラ」あるいは「リクラト」と総  
 称され、「因明 tshad ma」とは称されないのである。  
 因明が内明 (nang rig) であるか否かは古来から論議の  
 あつた所であるが<sup>(20)</sup>、あるいはそのような考慮が働いてい  
 たのかも知れない。いずれにせよこの課程内ではインテ  
 論理学書は直接は使用されず、チヤンの『マツラ』を始  
 源とする各種のマツラ書がテキストとされるのである。

次頁の表はそれぞれの学塾出身の informants から得た  
 チンタの名称についての情報を筆者の責任でまとめたも  
 のである。チヤンとシャルツェについては十分な情報が  
 得られなかった。作表にあたっては Sera-jeh Monastic  
 University, Bylakuppe, India の Jhado Tulku 師の助

力を得た。この記述して謝意を表わした。  
 それぞれの学塾には学塾ごと定められた学堂教科書  
 (インツァ yig cha) がある。一九七二年から一九七四年  
 にかけて New Delhi から出版された *Madhyamika  
 Text Series*, 8 vols は各学塾における中観のインツァ  
 を集めたものである。一般に言って学塾ごとに特定の  
 学者の一連の作品をインツァに採用するのが普通であ  
 る。例えばヒヤムではジヤムヤンシエーパおよびその弟  
 子筋の作品が学習され、ローセルリンではナンチヤン・  
 ノナムタツン Pañ chen bsod nams grags pa (1478-  
 1554) のものが、セラ寺のチューンではジヒツンパ・チ  
 ャーキゲーンツェン rJe btsun pa Chos kyi rgyal mtshan  
 (1469-1546) のものが、ネリセラではケートツァン・チ  
 ノンタルキチー mKhas grub bsTan pa dar rgyas (1493  
 -1568) の作品が、ネリセラ寺にある。がなみたガン  
 テン寺のシャルツェとチヤンツェはそれぞれチーポン寺  
 のローセルリンおよびセラ寺のチューパとそのイクチャ  
 の系統を同じくする。

Dga' ldan	Byang rtsa	Bho gsal gling	Tras spungs	Seo mang	Snad pa	Se ra	Byes pa
RIGS LAM.....1 bsduṣ chung pa.....2 bsduṣ chen pa 3 rtags rigs	1 bsduṣ chung pa.....2 bsduṣ chen pa 3 rtags rigs	1 bsduṣ grwa 'dzin dang po 2 kha dog gong ma 3 bsduṣ 'bring 4 bsduṣ chen 5 rtags rigs 6 blo rigs	1 kha dog dkar dmar 2 kha dog gong ma 3 bsduṣ 'bring 4 bsduṣ chen 5 rtags rigs 6 blo rigs	1 kha dog dkar dmar 2 kha dog gong ma 3 bsduṣ 'bring 4 bsduṣ chen 5 rtags rigs 6 blo rigs	1 bsduṣ grwa <bsduṣ chung> <bsduṣ chen>	2 gzhung gsar pa.....3 gzhung rnying pa 4 gzhung rnying gong ma 5 skatub gnyis pa 6 skatub bzhi pa 7 zur bkol or(phiaṣ phyin pa)	1 bsduṣ chung 2 bsduṣ 'bring 3 bsduṣ chen <blo rigs> <rtags rigs>

PHAR PHYIN.....	DBU MA.....	DUL BA	MDZOD
1 skatub dang po.....2 skatub gsum pa 3 skatub gnyis pa 4 skatub bzhi pa 5 skatub bgyad pa 6 skatub 'dzin grwa	3 sku gsum dik-yil 'phor.....4 gcig du bral 5 drang nges 6 sems bskyed 7 dge 'dun nyi shu 8 skatub bzhi pa	11 'dul ba 'dzin dang po.....12 ndzod 'dzin grwa 13 'dul ba 'dzin gsum pa 14 ndzod 'dzin dang po.....15 ndzod 'dzin gnyis pa 16 ndzod 'dzin gsum pa	13 'dul ba 'dzin grwa.....14 ndzod 'dzin dang po.....15 ndzod 'dzin gnyis pa 16 ndzod 'dzin gsum pa
10 dhu ma gsar pa.....11 dhu ma rnying pa 12 dhu ma rnying pa 13 dhu ma rnying pa 14 ndzod	9 dhu ma gsar pa.....10 dhu ma rnying pa 11 'dul ba 'dzin dang po.....12 dhu ma gsar pa 13 dhu ma rnying pa 14 ndzod	11 'dul ba 'dzin dang po.....12 'dul ba 'dzin gnyis pa 13 'dul ba 'dzin gsum pa 14 ndzod 'dzin dang po.....15 bka' rams 'og ma 16 bka' rams gong ma	12 dhu ma gsar pa.....13 dhu ma rnying pa 14 ndzod 15 bka' rams 'og ma 16 bka' rams gong ma
8 dhu ma gsar pa.....9 dhu ma rnying pa 10 'dul ba gsar pa.....11 'dul ba rnying pa	9 dhu ma gsar pa.....10 dhu ma rnying pa 11 'dul ba 'dzin dang po.....12 dhu ma gsar pa 13 dhu ma rnying pa 14 ndzod	11 'dul ba 'dzin dang po.....12 'dul ba 'dzin gnyis pa 13 'dul ba 'dzin gsum pa 14 ndzod 'dzin dang po.....15 bka' rams 'og ma 16 bka' rams gong ma	8 dhu ma gsar pa.....9 dhu ma rnying pa 10 'dul ba gsar pa.....11 'dul ba rnying pa 12 ndzod 'dzin grwa

三

リクラムの課程で使われるイクチャを各学堂ごとに整理してみよう。チーペン寺のローセルリンではスナムタクパの『*ドゥラ*』並びに彼の『ローリク』、『ターリク』が使われていたという。ロマンではジヤムヤンシエーパの弟子ガワンタシー Ngag dbang bkra shis の『*ドゥラ*』、『ジヤムヤンシエーパの『ローリク』と『ターリク』』としてチョクラーウーセル mChog lha 'od zer の『ラトマール<sup>(25)</sup>』 Rwa stod bsduṣ grwa が副読本として使われていたようである。この書は他の諸学堂でもイクチャとして採用されている。セラ寺のメーパではタクパシエーナム *Grags pa bshad sgrub* の『ターリク広説』 『*Tags rigs rtags rigs rgyas pa*』 『ターリク略説』 『*Tags rigs bsduṣ pa*』 ヤンチホンガールウーローター *dByanggs can dga' bai blo gros* の『ターリク略説』 『*Tags rigs kyi sdom*』 『ローリク略説』 『*Blo rigs kyi sdom*』 チナンリン<sup>(26)</sup>・ノホン<sup>(27)</sup>キヤムツォ *Chu bzang bla ma Ye shes rgya mtsho* の『ローリク』と『ターリク』が

使われていた。セラ寺チエーパではブル<sup>(28)</sup>・ヨンジン Phur leog Yongs 'dzin の『*ドゥラ*』、『ローリク』、『ターリク』が、ガンデン寺のシャルツェではスナムタクパのものが、そしてチャンツェではジンプン・チエーパル<sup>(29)</sup>キヤムツォ sByin pa Chos 'phel rgya mtsho の『ローリク』と『ターリク』が使われていたようである。さて、そのようなイクチャを使って進められるリクラム(広義の*ドゥラ*)の課程には大きく分けて三つの段階がある。すなわち『*ドゥラ bsduṣ grwa*』と『ローリク blo rigs』と『ターリク rtags rigs』とある。今日の言葉で言えばそれぞれ「存在論」「認識論」「論理学」ということになるだろうか。この種の分類は前述のイクチャの区分でもあるが、実はそのみでなく、より古く他のチベット撰述論書にも見ることが出来る。例えばサキヤン<sup>(30)</sup>チヤタの『リクタル』の章建は(31) shes byai yul (認識の<sup>(32)</sup>次第) (32) shes byed kyi blo (認識の本質) (33) blo des yul rtags pa'i tshul (その<sup>(34)</sup>次第を<sup>(35)</sup>把握する方法) の三つを軸に構成されている。また、ツォンカパの作った論理学綱要書 *Don gnyer yid*

kyi mun sel<sup>(28)</sup>の三章建つて、(a) yul (対象)、(b) yul can  
〔認識の〕対象を持つこと、(c) yul de rtogs pa'i  
thabs (その対象を「正しく」把握する方法)となっている。  
これら上記二書の分類方法はそのまま「トゥラ」「ロー  
リック」「タリック」というこの三つの基礎学の教科内容  
を指すものとして用いられる。

四

各学堂で用いられるトゥラ書類の内容はかならずしも  
全同ではないが、主要な点では一致している。その中、  
代表的な課題のみを拾い上げて「トゥラ」「ローリック」  
「タリック」という三段階の基礎学の内容を概観してみ  
よう。

「トゥラ」の課程は学堂によって二つ、あるいは三つ  
以上のチンタ 'dzin grwa (学後)に分けられると知られ  
る。まず各学堂で共通して見られるのは「kha dog  
dkar dmar」や「gzhi grub」の学習である。「kha dog  
dkar dmar」はそれがチンタの名称になっている学堂も  
あるが、直訳すれば「白色と赤色」という意味で、六境

の細分を例にとりて「白色」と「色」との包括関係や、  
「十種の赤色は色である」というような全称命題や「或  
る〔種〕の色は赤色である」というような特称命題との  
差異の説明がなされるのである。さらに「gzhi grub」  
の学習では経量部のシステムに則った存在の分類が学習  
される。ここでも各概念間相互の包括関係や同義関係は  
特に注意される。以上が初級の課題であって、次に中級  
になると抽象的存在の学習に入る。ここでは「ldog pa  
(<sup>(29)</sup>概念)」「gyu dang 'bras bu (因と果)」「spyi dang bye  
drag (類と種)」「brel ba dang 'gal ba (関係項と反対項)」  
というような論理的思考のために不可欠な諸概念が規定  
され吟味されるのである。これらの規定の中にはチャパ  
の創始になるものが多い。さつ、上級に入るや「thal  
'gyur (prasaṅga 辯護法)」の学習が行なわれ「論理関係」  
がひとつの課題とされる。そもそも「トゥラ」学習の目  
的は、上記のような諸存在の説示もできることながら、そ  
れ以後の僧院学習をつづけてゆく上で不可欠になる論争  
技術の習得、そしてそのための論理的な思考能力の訓練  
とすることが重要な要素なのである。

次の「認識論」を扱う「ローリック」の課程では「認識」  
を対象とする種々の観点からの分析が試みられ、学習者  
が重層的に心を把握するよう構成をなしている。すなわ  
ち 'tshad ma 'vishad min (新鮮でかみ合せする認識が否  
か)による分類、rtog pa 'v rtoḡ med (分別に伴うか否  
か)による分類、rang rig 'v gzhän rig (その認識が正  
的であるか外的であるか)による分類、sens 'v sens byung  
(心と心所)による分類などである。この注目をされ  
ばなるならは 'tshad min が 'dpyad shes] 'yid dpyod]  
「snang la ma nges pa」[the tshom]「log shes」の五  
つに分類されるが、これら 'tshad ma の二つすなわち  
「mngon sum gyi 'tshad ma」や「ries su dpaḡ pa'i  
'tshad ma」を加えて、心を二つに分類する方法 (blo  
rigs bdun du dbye ba) がこの課程で学習されるが、そ  
れはチャパによって説かれていた説であるという点であ  
る。この点もチャパの影響が見うけられるのである。  
さつ、「論理学」を扱う「タリック」では、インド的  
な論理学の説明方法がそのまま採用されている。すなわ  
ち 'tshul gsam (因と三蘊)から説き起し、'rtags yang

dag (三蘊の正しく論拠) 'v 'rtags 'har snang (三蘊の  
誤った論拠)が説示されるのである。

五

「トゥラ」「ローリック」「タリック」この三つの課程の  
三段階の学習をおして学習者は正しい論理的な推理と  
はどのようなものなのか、そしてその推理を駆使して  
のよう論争(教義問答)を行なうか、を習得するのであ  
る。推理の基準となるものは言ひがばもなく定義(mtshan  
nyid)である。学習途上で習得されるあらゆる概念を統  
語はあくまでそれに付された定義をおしてのみ把握す  
るよう訓練される。彼ら頭教哲学者が「ツェンニ  
mshan nyid pa」と称されるゆえんもそこに存在するの  
である。

彼らツェンニの学習法では口頭による問答が最も  
重要視される。その問答の作法を習得するのがリク  
課程の重大な目的のひとつなのである。

僧院内の問答にも、学堂ごとの対抗戦の形をとるツ  
クニン tshogs 'ljangs とよばれるものもあるが、学堂内

で日常的に行なわれる問答はタムチャー 'dam bca' とよばれ、或る一定の区切りがつくまで質問をする者は質問を述べ、答論をする者は答論だけをつづける、あるいは答論をする者だけが固定して質問者は交替する、という仕方をとる。そして、質問者(普通 *rtso'd pa po* とよばれる)が与えるきつかけに従って答論者(*dam bca' ba*)が命題(*dam bca' ba*)を立て、それに対する論難を質問者が行ない、答論者がそれに対して再び答える、という様に問答が進められていく。質問者が行なう質問は、「thal phyir」とよばれるきわめて形式化された推論式の作法に則った質問でなければならぬ。一方、答論者のほうには問答の流れを左右出来る選択権はなく、ただひたすら自らの答論の斉合性のみに関心掛けねばならないのである。これら問答の作法の概略については別稿<sup>(33)</sup>を参照されたい。

さて、学習者にとって、このような問答の作法の習得はその後の般若、中観等々の学習をするためには不可欠のものである。なぜなら、それらの課程で使われるイクチャのほとんどが「thal phyir」とよばれる問答体で

著されているからである。Scherbatsky も指摘するよ<sup>(34)</sup>うに、この文章形式の創始者はチャパであるとする伝承がある。チャパの教学はこのようにプログラムの課程のみでなくゲルク派僧院の頭等学習課程全般に影響をおよぼしているのである。

註

- (1) サンブ大学問寺の歴史および教学については、羽田野伯猷「チベットにおける仏教の形成について」『文化』第二九卷、昭和四〇年、一七二—一七六頁参照。
- (2) チャンは自立論証派の諸論師の著書に註釈を書いたのみでなく、チャンモラキーンマンの教学を批判しつつたよびをせられた。THE BLUE ANNALS, Tr. by George N. Roerich, Calcutta, 1949, (以下 BA) pp. 332—334。松本史朗「Tson kha pa 独自の中観思想について」『日本西藏学会会報』第二十七号、昭和五十六年の註(2)等参照。
- (3) BA, p. 70. 参照。
- (4) BA, p. 333. チャンは他にも多くの大乘論典に註釈を著したとよびをせられた。Leonard W.J. van der Kuip, *Phya-pa Chos-kyi seng-ge's Impact on Tibetan Epistemological Theory, TIBETAN STUDIES, University of Zürich*, 1978, pp. 163—177 の註(2)参照。

- (5) チャン門下の著者たちの中にはチャンの教学やその体系を継承したわけではなからず、特に中観に関心した第十の巻への反対の立場を採ったものがある。BA, p. 334. 参照。
- (6) シャーキャンモラキーンマンの『羽田野伯猷「Krasmi-ra-mahāpāṇḍita "Śākyasīhādra"」』『文化』第二二巻五号、一一二—一頁、を参照。
- (7) Ibid. 一七頁。および同氏「チベット仏教学の問題」『文化』第一八巻三号、七四頁参照。
- (8) シャーキャンモラキーンマンの『THE COMPLETE WORKS OF THE GREAT MASTERS OF THE SA SKYA SECT OF THE TIBETAN BUDDHISM』東洋文庫、一九六八年、第七巻、一五五—二六四頁、同書第二の巻註「*Tshad ma rigs pa'i gter gyi rang 'grel*」を参照。
- (9) 大谷 No. 6138, *Rnye rin po che blo bzang grags pa'i dpa' gyi gsum yig*, TTP, Vol. 153, 158-5-3. ン

- (10) 松本史朗「Sa skya paṇḍi ta の教学と関係について」『日本西藏学会会報』第二二巻四号、昭和五十二年、七四頁参照。
- (11) 松本史朗「Blo gsal grub mtha'」について『密教研究』第一五号、昭和五十二年、pp. 95—111. の註(9)を参照。松本史朗「sTag tshah pa の Tson kha pa 批評について」『日本西藏学会会報』第二二巻四号、昭和五十二年、一一—四頁参照。
- (12) フォンテンの『チベット批評』について、松本史朗「Tson kha pa 独自の中観思想について」『日本西藏学会会報』第二十七号、昭和五十六年、四一—七頁。および同氏「チンカンの中観思想について」『東洋学報』第六二巻第三・四号、一九八一年、一七四—二二二頁参照。
- (13) 松本史朗「チンカン」の『rdzas Idog』について『チンカン』(註(2)参照) p. 68. について「rdzas Idog 'di sngar nas sa dge'i mtshan nyid pa kun la grags che zhing」を参照。
- (14) Klong rdol bla ma ngag dbang blo bzang, *Tshad ma rnam 'grel sogs gtan tshigs rig pa las byung ba'i*

- ming gi grangs* (cf. Tohoku No. 6545), 2b2 (Sata-pitaka-Series, Vol. 100, p. 663)
- (19) 丹生和雄「チベット史の歴史」講座仏教書四巻『中国の仏教』二二五—二二五二頁、昭和三十二年、二四七頁参照。ただし、チベット・チベットキヤンボクの努力により、チベット語の原典が日本語に訳されている。
- (19) ヤン・ツェン・チン『チベット史の歴史』二二五—二二五二頁、昭和三十二年、二四七頁参照。ただし、チベット・チベットキヤンボクの努力により、チベット語の原典が日本語に訳されている。
- (19) Mus sras pa rin chen (Jam dbyang chos rje の直筆) のチベット文の原典がチベット語に訳されている。彼の著書『チベット史の歴史』二二五—二二五二頁、昭和三十二年、二四七頁参照。ただし、チベット・チベットキヤンボクの努力により、チベット語の原典が日本語に訳されている。
- (19) Sde srid Sangs rgyas rgya mtsho, *Vaidaryā sar po*, ed. by Lokesh Chandra, Śatāpitaka-Series, Vol. 12, p. 121. 参照。
- (21) Phur bu loog Ngag dbang byams pa, *Gywa sa chen po bzhi dang rgyud pa stod snad chags tsul pad dkar 'phreng ba*, THREE KARHACKS, Geden Sungrab Minyam Gyumphel Series, Vol. 13, pp. 46—169 参照。
- (21) 龍藏法師の年譜は徐々に短くなっていく。その理由は、Geshe G. Lodro, *Geschichte der Kloster Universitat Drepung*, Wiesbaden, 1974, p. 236. 440. 御教書に「チベット語仏教の歴史」『龍藏法師の年譜』二二五—二二五二頁、昭和三十二年、二四七頁参照。
- (22) ヤン・ツェン・チン『チベット史の歴史』二二五—二二五二頁、昭和三十二年、二四七頁参照。
- (22) *Go nang jig cha*, Dharamsala, 1973, 所収。
- (23) *The Collected Works of Jam-abyams-bzad pa'i-rab- rje*, New Delhi, 1972—74, Vol. 15 (Geden Sungrab Minyam Gyumphel Series, Vol. 54), pp. 177—301.
- (24) Cf. Tohoku No. 6858. 最近ヤン・ツェン・チンと我出版された。 *Rewa stod bsdus gywa*, Dharamsala, 1980.
- (25) Cf. Tohoku No. 6857. 同書第五章に「チベット語『bsdus-gywa』の序言」を収める。『チベット語仏教研究』第二七巻第一号、一九六一—一九七頁参照。

- (26) Cf. Shunzo Onoda (ed.), *THE YON'S 'DZIN RTAGS RIGS, A Manual for Tibetan Logic*, Studia Asiatica No. 5, Nagoya 1981.
- (27) Cf. Tohoku Nos. 6859, 6860.
- (28) Cf. Tohoku No. 5416. ヤン・ツェン・チンと我出版された。 *Sde bdun la 'jug pa'i sgo don gnyer yid kyi mun sel*, Varanasi, 1972.
- (29) 拙稿『Idog pa』『チベット語仏教研究』第二二巻第二号、六五四—六五五頁。440. 同『Idog-chos』『チベット語仏教研究』第二九巻第一号、三八—五—三二二頁参照。
- (30) 拙稿『spyi (類)』と『bye-brag (種)』に「チベット語仏教研究』第三〇巻第二号、九一五—九二二頁、参照。
- (31) 拙稿『brel-ba (関係項)』と『gal-ba (反対項)』に「チベット語仏教研究』第三二巻所収予定、参照。
- (32) ホン・ツェン・チン『Tshad ma rig pa'i gter gyi dka'i ba'i gyas rnam par bshad pa sde bdun rab gsal』、『チベット語仏教研究』第二二巻所収。そのうち「チベット語の同義語」(17-2-1)。*Kuip* 氏による指摘がある。註(4)の同氏論文 p. 170 参照。
- (33) 拙稿「チベット語の僧院に於ける問答の類型」『仏教史学研究』第二二巻第一号、一一—一六頁参照。
- (34) Stecherbatsky, *Buddhist Logic*, Vol. 1, p. 58. (440. 同氏による。仏教大学助手)